

日中両国における近代詩革命

—「新体詩抄」と「白話詩運動」の比較—

Modern Poetic Revolution in Japan and China

“New Poetic style” and “The Conversational Poetic Movement”

葉 寄 民*

The Japanese Poetic Revolution began in 1882 with Toyama, Inoue, Yatabe i. e. Shintaishisho. In China, however, the Revolution began in the year 1917 with Dr. Hu Shi's Literary Revolution Discussion “Xin Qingnian” (Volume II number 5.) The following year (1918) a different eight Conversation Poems were written.

We cannot deny the importance of modernization of the historical process when we consider Japanese and Chinese literature. We must especially understand the historical feudal influence these two factors are the common points of “Shintaishisho” and “The Literary Revolution Suggestion.

As we know, the basis of this common point is that they identify with Western influence and consider the human spirit and society of the pre-modernization of Japan and China. The Japanese literary critic Mr. Takeuchi Yoshimi has stated that the problem of modern Chinese literature

* Yeh ChiMin [現職] 跡見学園女子大学講師

is a problem of modernization of its that his statement can also be applied to Japanese modern literature.

In the manuscript, my thesis maintains that in order to discuss Japanese and Chinese modern Poetic Literature, it is Required to understand the source of this movement. This is to be found from the comparative influence that European and American literary achievements have had on modern Japanese and Chinese authors.

1. 日中両国近代詩革命の前夜

1. ウェスタン・インパクト

アジア東部の日中両国近代化(広い範囲では東洋の近代化の一部分)で共通するものは、両国の上部構造と下部構造に変化が起り、近代化する内因が存在したのではあるが、直接の外因は西欧の衝撃が付け火ということだった。しかし、同じウェスタン・インパクトとは言え、両国がそれに対処する態度と近代化のテンポは著しく異なる。

19世紀中葉に実現された欧米列強の日中両国との通交は、開国より余儀なく締結した条約からして、決して平等互惠ではなかった。

先ず中国について言えば、1840年のアヘン戦争後、1842年の南京条約を始めとする諸条約は、中国の関税自主権を剥奪し、領事裁判権、最恵国條款を一方的に押しつけられた。

1851年の太平天国の国内の大動乱、1856年の第二次アヘン戦争、1858年の英仏軍の広東占領などの列強の圧迫と対外戦争で、外国の戦力をまのあたりに見た当権派の曾国藩、左宗棠、李鴻章ら諸官僚は、満洲貴族を中心にした西太后一派と結んで「中体西用」論をかかげ、西洋の兵器と科学技術を取り入

れて富国強兵を計る「洋務運動」を開始した。だが、彼等は「祖宗の法」を固執してあくまで近代化を拒否した頑迷な反動派であり、太平天国の人民の革命蜂起に対しては封建地主権力を維持するために外国帝国主義の力を楯にこれを鎮圧し、自ら買弁化して中国の半殖民地化を深める結果となった。

1894年、甲午戦争（日清戦争）惨敗のショックは大きかった。「支那四千年の夢をやぶったのは、じつに甲午戦争である」（梁啓超「戊戌政変記」）と言う危機感に駆りたてられた康有為、梁啓超、譚嗣同ら下層官僚は、儒学の伝統に立ちながらも「祖宗の法」を変えることなくしては中国を救うことは出来ないと考え、政治変革を中心とした戊戌変法維新運動（百日維新）を展開した。

1900年の義和団事件で、天津・北京が列国連合軍に陥落され、中国は列強に分割される寸前の次殖民地的地位にまで顛落したが、その反面、熾烈な民族主義意識と民主主義精神の覚醒の下で近代的西洋学術を身につけたインテリゲンチヤは、華僑などを中心とした孫文による救国救民の革命運動に走った。

孫文は主観的には社会主義者、客観的にはブルジョワ民主主義者であるが、彼が組織した同盟会は清朝打倒をめざす秘密結社や、華夷思想など中国の伝統的な反逆思想が底流にあった。

この革命運動は遂に1911年武昌起義として爆発し、清朝は崩潰して中華民国を樹立したものの、中国の半殖民地、半封建社会は少しもかわらなかった。

1915年1月第一次世界大戦の最中に、大隈内閣は21カ条要求をつきつけた。それは山東におけるドイツ権益の継承を始めとする、事実上中国を日本の独占的な植民地にするのとかわりのない、広範囲かつ露骨な帝国主義的内容のものであり、日中関係を決定的に悪化させる契機となった。

これと期を同じくして、民国革命の成果を横取りした袁世凱は、日本の対華21カ条要求にともなう反帝国主義・対外一致の聲の高まりを巧みに利用して行き、遂にはその御用団体「等安会」の推進の下に民意に従う形式をとり

ながら皇帝に即位せんとした。このような混沌とした内外問題と前後して、国内では反動支配の圧迫に抵抗する全国的討袁、反帝制の渦の中に、「新青年」雑誌を中心とする思想革命、精神改造を主張する新文化運動が展開され、「儒教打倒」「民主と科学」「個性の解放」「文学革命」が澎湃となり、それに反帝国主義の運動が油をそそいで燃え上った。

ヴェルサイユ講和会議で山東權益の回復が水泡に帰したとき、いわゆる1919年の「五四運動」が勃発するのであるが、白話詩運動を内包する文学革命が、実にこの激動する歴史の潮流の中で始まっている事は、それが単なる文学革命ではなく、政治、思想、文化方面における近代化と有機的に結合していることは明白である。

目を移して日本を見れば、中国に遅れること13年、1853年（嘉永6年）、ペリーにひきいられたアメリカ艦隊が浦賀に入港して開港を強要し、翌年には日米和親条約が結ばれている。やはり大砲による門戸開放だったのである。然しながら、日本は阿片戦争の前年（1838年）、高野長英や渡辺華山らはすでに西洋大国である英国の軍事力に注意をはらっている。これは西洋の地理知識を書いた清の魏源の「海国図志」（1842年）よりも4年前であった。

ペリー来航以来、日本はすぐに長崎で海軍訓練が始められ、西洋学術の研究が叫ばれ、国禁が解かれ、旗本たちの学習が許されたのである。

1868年、明治維新になると挙国一致と言えるほど西洋に追いつき追い越せというような意気込みで近代化の道を前進し、さらに日清、日露両戦争を経て世界列強に仲間入りし、資本主義国家として成長した。

この日中両国の西洋の衝撃に対処する態度とテンポは、19世紀後半の両国の歩むコースと運命を大きく変えるが、それが文学運動にも投映されている。

2. 詩革命の源流、発端と内容

先ず日本について言えば、明治維新から明治20年あたりの文化を鳥瞰すると、20年までを開化啓蒙期とみることができよう。

文学は江戸末期の延長線上にある仮名垣魯文らの戯作文学と旧武士の学者、

文人が漢文で書く諷刺的な戯文で代表されるが、明治10年代に入ると、西南戦役後の自由民権運動とともに、政治小説がさかんに書かれ、この頃から西欧の思想、文学の翻訳、翻案があいついでなされた。これを通じて日本の思想、文学の近代化は幅広い基盤がつくられるが、1885年（明治18年）坪内逍遙の小説「当世書生気質」と文学の自律性を主張した評論「小説神髓」、翌年の二葉亭四迷の「小説総論」で近代文学が発足し、その理論実践として言文一致体で書かれた「浮雲」が近代小説の骨格を具えていると言うことになるが、「新体詩抄」がちょうど明治10年代と近代文学成立の中間にあって、新体詩運動が何らかの形で橋渡しの役をなしているのは注目に値する。

日本近代詩の発生を考察するとき、広い意味で室町時代末期の南蛮文学とキリタン文学と江戸時代の蘭学は地下水といえよう。だが、徳川幕府三百年の鎖国政策は近世日本と外国文化の交流をあまりにも強くはばんだ。故に北原白秋が「明治大正詩史概観——新体詩以前」で「元禄の芭蕉さへが談林の俗俳を正し、座談平語を詩語として正し、東洋の象徴句を完成したとはいへ、蘭人花見の風俗を句にしたくらので、詩形についてはただ和歌の一体を整へたに過ぎなかった……。ただ祈祷の讃倡・伊曾保物語いそつぶなどの翻訳などに西詩の新様と日本の古雅とを融合せしめたものはあった」と述べているように、南蛮、キリスト文学と蘭学は日本の詩歌に薄い影しか投影しなかった。と同時に、それが「新体詩抄」以前の詩壇であろうと見なしてよいのではないかと思う。1805年の大槻平泉の「三国祝章」が東西文化のある程度の交流の一例と言える。

延保2年（1745年）、天明の俳人と謝蕪村（1716～1783年）が作った「北寿老仙をいたむ」は近代詩のパイオニアの足跡をもつもので、この追悼曲は日本詩歌の本質的律格の五七音からはみだして、徳川期の俚謡の整調形式とみなされる七七五七の26音型とも異なるが、特徴的なのは、蕪村が知己の友の死を悼んで歌おうとした感情がどうしても伝統詩型では表現しきれないので、この表現形式をとった所にある。

蕪村に続いて先駆者の一人とみられている人に中島広足（1792年～1864年）がいる。「後葛路日記」に収められた彼の訳詩「やよひのうた」は、日本近代詩と洋詩の関係を眺める上の貴重な存在である。訳詩型は万葉集の長歌を踏襲しているが、西洋詩を直訳した点で珍しい。石本若根の研究によると、原詩はドイツの宗教詩人クラオディウスの抒情詩「五月の歌」の第一節であるという。

この他に、外山正一によって「東洋学芸雑誌」に掲載されたもので、勝海舟が文久2年（1862年）に訳した長歌体「思やつれし君」(ローフデンヘール Loef don Heer) がある。

以上の例からして、日本近代詩の源流はかなり長く、時代環境によりかなり曲折したものであるが、明治時代に入ると、その啓蒙運動とともに、西洋詩の漢訳、福沢諭吉の「世界国尽し」(明治2年＝1869) の如き律文体の思想啓蒙を目的とする書籍が出現する。また1873年のキリスト教解禁とともに隆盛になった讃美歌の翻訳及び創作が目に見えてくる。その例として、1874年、長崎ダッチ・リフォームド教会、長崎メソジスト教会の「讃美のうた」があり、翌年には「神戸版無題讃歌集」、1882年5月には「改正讃美歌」(熊野雄七編) がある。

明治12年6月には自由民権運動と呼応して歌う植木枝盛の手になる「民権田舎歌」が出現し、明治14年11月には、伊沢修二編集の「小学唱歌集初編」が文部省より出版された。これらの讃美歌、政治歌謡、唱歌集は多少ともに明治時代の開化と啓蒙の範疇内のものであるが、ともに「新体詩抄」の先声をなすもので、近代的人間形成の内質をもっているといえる。

中国近代詩革命の源流に視点を移してみると、若し白話（口語体）を詩の表現としてみるならば、白話発生の唐宋にまで源流を溯っていかねばならぬだろう。が、ここで論じる詩革命の内容が近代社会とその人間の目醒をかなめにする限り、やはり中国近代史以降の文学史から考察するのが当然である。この見解によれば、詩革命の源流は阿片戦争（1840年）から五四新文化

運動直前（1915年）である。

近代の胎動にいち早く反応したのが龔自珍（1792～1841）である。梁啓超が「自珍・性・談宕てつとうにして細行を検せず、頗るフランスのルソーに似たり…
晩清の思想解放に、自珍、確かに与りて功あり」（「清代學術概論」）と彼を評価しているように、純粹の詩人であり、「洋務派」「変法派」に大いなる影響をあたえている。

龔自珍の延長の上に黄遵憲（1848～1905）がいる。彼は詩文では強く擬古派に反対して、良き詩は個性と自我の真面目がなければならぬとし、口語を主張して「我手写我口」（わが手わが口を写す）と21歳の雑感の中で文語を墨守する文壇に反発し、権威を拒む近代精神をうちだしている。だが、その詩は「箋注」を必要とする文語が多いので「白話詩」とは言えない。梁啓超は「過渡時代には必ず革命がある。しかし革命はその精神を革めるべきであり、その形式を革めることではない。わが党は近ごろ好んで『詩界革命』をいう。…古い風格で新しい意境を含ませることができれば、そこに革命の実を挙げることはできる」（「飲冰室詩話」）と詩革命の過渡時代を設定して言うのであるが、しかし、精神を革めるだけでその表現形式を革めないという点は、つまり詩の表現形式は詩精神の表現しようとする思想や感動に関わりがないと言うが如きものであり、内容と形式は切りはなせないという詩の本質を見落していると言えよう。かくのように述べた梁啓超も又文学革命の先駆的存在である。

梁啓超は「変法維新」が保守派のクーデターによって覆された時、清国を旅行中の伊藤博文・北京代理公使林権助に救助され、日本の軍艦で日本に亡命した。（林権助「わが七十年を語る」1935年、第一書房）。彼は日本に来ると「清議報」を横浜で出版して国民意識の変革に手をつけ、ヨーロッパの国家思想、民権思想、近代學術、近代精神を大いに紹介して啓蒙に努めた。ホッブス、スピノザ、ルソー、アダムスミス、デカルト、ダーウィン、モンテスキュー、ベンサム、カントたちの思想がそれである。文学の面では「小説界革命」を

提唱して、東海散士の「佳人之奇遇」、矢野龍溪の「経国美談」等を「清議報」に訳載した。「清議報」廃刊後には政治思想の啓蒙雑誌「新民叢」を発刊し、1902年には月刊「新小説」をも刊行して、その発刊予告には「本誌の主旨はもっぱら小説家の言を借りて国民の政治思想を啓発し、愛国精神を激励するにある」(「新民叢書」第14号)と宣言して、その創刊号には「小説と政治との関係を論ず」と書いて、自分の書いた『新中国未来説』(1902年)を連載していった。日本の政治小説が彼に大きな示唆を与えているのは明らかである。何幹之は「新民の二字は字義からいえば民主国国民の総称であって、梁啓超の『新民』は陳独秀の『新青年』と同一のものであった」(『近代中国啓蒙運動史』第三章「戊戌維新運動」と規定している。

英国に留学した嚴復(1853年～1912年)はハックスリーの「進化と倫理」(Evolution and Ethics and Eassys)と序説の「プロレゴメナ」を「天演論」と題して翻訳した。1896年の夏である。「天演」(進化)「物競」(生存競争)「淘汰」「天択」(適者生存)などの観念が当時の危機感とあいまって砂にしみこむ水のように滲透したのは当然すぎるほど当然であった。

文学作品の翻訳については、桐城派の古文大家、林紘(1882～1924)を挙げねばならない。彼の手になる外国文学の翻訳は「巴黎茶花女遺事」(小デューマの「椿姫」)を皮切り156種もある。外国語を解しない彼は、外国語を知る人が語るのを訳したから、かなり恣意的な訳であったものの名文であった。これらの小説は欧米人の国民性と社会組織、外国小説と中国小説の差異を、中国人に認識させるのに役立つのである。後に林紘は「文学革命」に反対し、「妖夢」「荊生」等の小説を書いて陳独秀、胡適、錢玄同らを罵倒し、古文を擁護して論陣を張ったが、遂に歴史の狂流に呑みこまれてしまった。

文学革命の源流の一つには白話(口語体)がある。清朝末期の戊戌政変後、中国各地にいろいろな白話新聞が発刊された。「文学革命」の提唱者である胡適、陳独秀も早くから白話文に関係をもっている(蔡之培「我在北京大学的経歴」と胡適「四十自述」を参照)。だから、胡適・陳独秀が「文学革命」で、

清朝末年の解放運動としての白話報運動を念頭においた可能性は大いにありうるだろう。

「白話」を意識変革の武器とみなした一例を挙げると裘廷梁がいる。彼は、1898年7月「蘇報」に「論白話為維新之本」(「白話は誰新の本であることを論ず」)を書いた。その文の中で、彼は中国人民が蒙昧であるのは「これ文語の害」であると言い切り、人が文字の奴隷となったからであり、更に彼は、日本が漢字を和訓読みし、また和字(カナ)を混えた平易な文章(彼はそれを白話という)によって国力を充実させたことを称讃して、国力を強大にするには白話以外にないと述べるが、「口語運動」を推進するにあたり、彼は「白話」には「八益」があるとと言い、その第4番目に「保聖教」(聖人の教えをまもる)を挙げていて、意識の変革や反封建・反儒教を標榜した「文学革命」の白話運動とは大きなへだたりがある。

以上、簡単に日本の「新体詩抄」と中国の「白話詩運動」の源流を述べてきたが、これから、その発端と内容についてみていきたい。

「新体詩抄」は1882年(明治15年)8月、井上哲次郎(巽軒)、矢田部良吉(尚今)、外山正一(山)三学者の手になり、書肆丸屋善七が出版した。日本近代詩の新しいスタートである。

「新体詩抄」19編のうち、創作は5編、14編は訳詩であった。これは編纂者たちが理解した近代思想と人間感覚を自分の生活意識として芸術的に十分に形象化しえなかったと言うことが、訳詩と創作詩の比例から見ても理解しえよう。つまり言葉を変えて言うならば、自我をあつかった対象を日本人の感覚としてイメージ化しえなかった事を如実に物語っている。

外山と矢田部二人は、ともにアメリカに留学し、H・スペンサーの進化論哲学の洗礼を受け、帰国後も肩を並べて東京大学にて教鞭を取ったことから、友情、思想上固く結ばれたのである。当時の東大は、ダーウィン進化論を初めて日本に紹介した米人モールス、或いは進化論に立脚した哲学を講義したフェノロッサなどが居たのを見ても、進化論の牙城であったことが分る。こ

の外山・矢田部・モールス・フェノロッサ4人が東大で日本に進化論派の学術を導入し、体系化しつつある時に、井上哲次郎が在学していた。井上は卒業後、哲学史の助教授となり、東大の「東洋学芸雑誌」をも編集したが、明治17年にはドイツに留学し、西洋哲学を専攻して観念哲学に移行した。

外山・矢田部・井上三人の関係をみると、同じく東大の教授であり、また井上と外山は師弟の間柄である。「新体詩抄」が成立したことは、偶然ではなく新時代の思想と一つの文化集団からなる文化的活動とみなすことができよう。

「新体詩抄」の目的、主張は何であったかを考察する時、最も適当なのは、巻頭の序文と凡例であろう。

「…且夫泰西之詩、隨世而變。故今之詩、用今之語、周到精緻、使人翫誦不倦。於是乎又曰、古之和歌、不足取也。何不作新體之詩乎。既而又思、是大業也。非學和漢古今之詩歌、決不可能。乃復學和漢古今之詩歌。咀英嚼華、將以作新體詩。而未知其成與否也。屬者、山仙士與尚今居士、陸續作新體詩以示余。余受而誦之、其文雖交俗語、而平平坦坦、易誦易解。乃歎曰、有是哉。雖閭里童稚、於習聞之、何難之有、且作此詩、以發舒情志、則不亦勝於作唐詩以招詭符之詭乎。乃與二君屢相往來、改格正調、所作不為少。因撰其佳者、名曰新體詩抄、是為第一編。…」(巽軒居士井上哲次郎撰)

「…唯頃者同志一二名ト相謀リ我邦人ノ從來平常ノ語ヲ用ヒテ詩歌ヲ作ルコト少ナキヲ嘆ジ西洋ノ風ニ模倣シテ一種新體ノ詩ヲ作り出セリ但シ今成ル所ハ西詩ノ訳ニ係ルモノ多シ…」(尚今居士矢田部良吉撰)

「蓋し日本人に取りては支那流の詩は、恰かも瘧の手真似、若くは操人形の手踊の如きものなり……人の鳴らんとする時は、しやれた雅言や唐国、四角四面の字を以て、詩文の才を表はすも、我等が組に至りては、新古雅俗の區別なく、和漢西洋ごちゃまぜで、人に分かるが專一と、人に分かる自分極め、易く書くのが一つの能見識高き人たちは、可咲しなものと笑はゞ笑へ……」(山仙士外山正一識)

凡例は四つあるが、第一と第三だけ引用する。

(1) 均シク是レ志ヲ言フナリ、而シテ支那ニテハ之ヲ詩ト云ヒ、本邦ニテハ之ヲ歌ト云ヒ、未ダ歌ト詩トヲ総稱スルノ名アルヲ聞カズ、此書ニ載スル所ハ、詩ニアラズ、歌ニアラズ、而シテ之ヲ詩ト云フハ、泰西ノ「ポエトリー」ト云フ語即チ歌ト詩トヲ総稱スルノ名ニ當ツルノミ、古ヨリイハユル詩ニアラザルナリ。

ウベルススタンザー

(1) 此書中ノ詩歌皆句ト節トヲ分チテ書キタルハ、西洋ノ詩集ノ例ニ倣ヘルナリ。

要約すれば、三人の主張はほぼ次の通りである。つまり、明治の新しい時代意識は日常の口語体で歌い、新しい形式で表現すべきだと言うことである。前近代的社会の封建意識、道徳及び価値観念は、明治の新しい社会に反するものであり、斬新な意識は日常口語で表現されるべきで、形骸化した伝統的な詩語は時代に適応した複雑な思想感情を盛りこみ、あますことなく表現しえない、故に西洋の詩型をモデルにして「新体詩抄」を世に問うたと言うことである。言うまでもなく、外山らが西洋のポエトリーを意識しなかったら、詩革命などは考えなかったはずで、異質の文化や制度の媒介によって開かれた目で自国の文化の本質をみつめ、検討し、その在り方を批判すれば、自国の伝統的文化に対する破壊性を志向するのは当然だといえよう。問題になるのは、詩語と詩体を表現形式として気をとられるあまり、詩語と詩体は本来、単に表現形式としてではなく、むしろ生活観念、詩精神の体現として表出されるものであるを見落している点である。社会構造とそれに根ざした生活や精神意識がそれなりに言語、文化に表現されるのは自明の理であり、意識の根源的な変革なくして、生きた詩語は現われないはずである。これはもとより「新体詩抄」の作者たちがただ外見よりとらえた西洋詩の句とか節などの単純な問題ではない。この点は彼らが詩語、表現形式を云々するが、その反面、内容についてはほとんど語っていないというのも、故なしではない。日夏耿之介は「此新体詩は、詩形としても必ずしも新体のものではなかった…形式は則ち昔乍らの長歌今様の類を出でず、内容は、西洋詩の粗雑なる

外貌模倣にすぎなかった」(「明治大正詩史」巻ノ上)と酷評しているが、的を射ている。真の詩人は詩精神が発酵した内容をびったりした詩形に一つの有機体として詩を創作するものである。ただ、ここで言えるのは、「雅語のみに執せず、雅俗を問はず、あらゆる国語を大胆に使用した点で新しき試みとしての値がある」(「日夏耿之介前掲書」)と言う点では文学史的に肯定されて然るべきである。

中国の白話詩革命の指導者たちも殆んどが外国留学の学者だった。

胡適(1892年～1962年)は安徽省の人で、1910年に清華学校公費留学生としてアメリカのコネル大学とコロンビア大学などに留学し、ジョン・デュイについてプラグマティズム哲学を学んだ(自伝「四十自述」を参照)。彼は留学中に「新青年」(1917年1月、第2巻5号)に「文学改良芻議」を寄稿したところ、陳独秀が呼応して「文学革命論」を書き、論争をまき起して文学革命運動の発端となった。17年帰国後、北京大学教授に迎えられてからは、イプセン論を書いて婦人解放、家族制度などに挑戦するなど、五四文化運動の指導者としてめざましい活動をした。

陳独秀(1880年～1924年)は、胡適と同じく安徽省の人で、少年時代には伝統的教育を受けたが、疑問と反撓を感じて西欧近代思想に共感した。青年時代には排滿革命運動に参加、口語新聞を発行して革命の宣伝を推進したが、弾圧を避けて1909年には日本へ留学、正則英語学校やアテネ・フランセで勉強した。彼は第二次革命(1913年、江西都督李烈鈞の反袁世凱挙兵)で日本に亡命した。この頃より政治の現状に絶望して思想革命が第一義であると認識するに至り、1915年には「新青年」雑誌を刊行し倫理革命(儒教批判)、文学革命を主唱した。彼の急進的な自由主義と厳しい伝統批判は青年界を風靡した。1917年北京大学文科科長になると、胡適、李大釗、魯迅、錢玄同たちと手をとって新文化運動の指導者となった。

「白話詩運動」——「文学革命」の経過をかいつまんで言えば、次の通りである。

胡適が陳独秀主宰の「新青年」雑誌に「文学改良芻議」を発表したことは、中国における「文学革命の正式なる宣言書」であった（李何林「近二十年中国文艺思潮論」）。「文学改良芻議」を述べる前に、「新青年」について述べておきたい。

「新青年」雑誌は、第1次世界大戦の最中の1915年9月15日に、陳独秀の手で上海の群益書社から「青年雑誌」双月刊（隔月刊）としてスタートした。第1巻1号から6号まで刊行されたが、2巻1号からは「新青年」と変名された。袁世凱の反動的暗黒政治下において、それに対抗して封建制度の政治や文化、とりわけ、その基盤である儒教倫理に反旗をかかげ、自由民主主義と科学、懷疑精神と個人主義を主張する思想界のパイオニア的存在であった。

陳独秀は「^{つし}敬みて青年に告ぐ」（「青年雑誌」創刊号、1915年9月）の中で、青年たちに自覚を呼びかけて次の6原則を提起している。

1. 自主的であれ、奴隸的であるなかれ。
2. 進歩的であれ、保守的であるなかれ。
3. 進取的であれ、隠遁的であるなかれ。
4. 世界的であれ、鎖国的であるなかれ。
5. 実利的であれ、虚飾的であるなかれ。
6. 科学的であれ、空想的であるなかれ。

この6原則がとりもなおさず「新青年」の主旨であった事を思えば、「文学改良芻議」に陳独秀がいち早く呼応して「文学革命論」を発表し、急進的に文学革命運動に挺進した理由がわかるであろう。

胡適は国外においても「新青年」を読んでいたのであろう。2巻1号にはニコライ・ドミトリェヴィチ・テレスコフの「決闘」を投稿しているばかりでなく、中国文学の墮落の原因は「文勝於質」にあると、陳独秀に手紙を書き（「新青年」2巻2号「通信」1916年10月）、文学を改革する八項目を提唱したが、その八項目と「文学改良芻議」は同じである。

一曰、須言之有物（内容のある事をいう。）

二曰、不摹倣古人（古人の模倣をやめる。）

三曰、須講求文法（文法にかなう文章を書く。）

四曰、不作無病之呻吟（理由もなく深刻がらない。）

五曰、務去爛調套語（陳腐な常套語はつとめて避ける。）

六曰、不用典（典故は用いない。）

七曰、不講对仗（对句を考えない。）

八曰、不避俗字俗語（俗字俗語を避けない。）

そして、胡適は「二、古人の模倣をやめる」の項で、次のような解説をなしている。

「文学は時代とともに移り変わるものである。どの時代にもそれぞれの時代の文学がある。周、秦の時代には周、秦の文学があり……これは私一人だけの個人的な意見ではなく、文明進化の原理である。……（中略）……以上、文学は時代とともに進化して、自ら停止することのできないものであることが明白である。…自然な発展にそむき、進化の足跡にさからうからうまくできないのである。

文学進化の原理が明らかになれば、私の言う『古人を模倣しない』という提唱が成立するわけだ。今日の中国は今日の文学を創るべきで、唐・宋を模倣する必要もなければ、周・秦を模倣する必要もない……」

つまり、彼の考えは「文学は時代とともに移りかわるものである。どの時代にもそれぞれの時代の文学がある」と言う歴史進化論的な考えである。この件くだりは、「明治ノ歌ハ明治ノ歌ナルベシ、古歌ナルベカラズ、日本ノ詩ハ日本ノ詩ナルベシ、漢詩ナルベカラズ、是レ新体ノ詩ノ作ル所ナリ」（巽軒居士）と宣言する井上哲次郎と同じ立場にある。

要するに、胡適は歴史進化論とプラグマティズムの観点から、文語は硬化、形骸化して、今の時代の文学表現の武器たりえないから速やかに文語を廃して口語にせよと文学の表現形式の改革を主張する。これは確かに封建思想を表現する文語を廃止するという、とりもなおさず封建思想に対する攻撃であ

り、挑戦でもあった。しかし、その主張は文学的内容よりも形式の変革に重きをおいたので、第1項の「表現には内容がなければならない」の点が、如何なる内容を要求するかは漠然としている。この点は「新体詩抄」の人たちも同じである。この盲点を補足するものが陳独秀の「文学革命論」(1917年2月「新青年」2巻6号)である。

「……孔教問題が、いま国内ではげしく論議されているが、これは倫理道德の革命の前ぶれである。文学革命の気運が起こったのは、昨日今日の事ではないが、まっ先に義旗をかかげた急先鋒は、わが友胡適である。私は甘んじて全国学究の敵となって高く『文学革命』の大旗をかかげ、わが友を声援する。旗上に大きく書き出す我が革命軍の三大主義はこうである。技巧的^〇で阿諛^〇的^〇な貴族^〇文学^〇を打倒^〇して、平易^〇で直情^〇的^〇な国民^〇文学^〇を建設^〇する。陳腐^〇で誇張^〇的^〇な古典^〇文学^〇を打倒^〇して、新鮮^〇で誠実^〇な写実^〇文学^〇を建設^〇する。曖昧^〇で難解^〇な山林^〇文学^〇を打倒^〇して、明瞭^〇で通俗^〇的^〇な社会^〇文学^〇を建設^〇する。(以下略)」(傍点筆者)

「文学革命論」に於いては「旧」に対する「新」といった内容の革命性ははっきりしている。

時間の関係で詩をあげて説明し、以後の展開を省略することにして、日中両国の近代詩の異同点を簡単に要約して終りにしたい。

1. 新旧の過渡期に詩革命が起こった。「新体詩抄は明治維新と言う革命(上からの政治革新であるが、広い意味では革命と言えよう)の啓蒙期と体制が固まりつつある時期に発した。「白話詩運動」は辛亥革命後の民族的危機の時期に文化革新運動と共に勃発している。新生を生む動乱の時代は、新しい歌声を求めるものである。

2. 日中両国の詩革命に「口語」による詩表現を提唱した人々は、思想家であり、学者であった。彼らは共に新しい西洋文化思想に立脚して自国の文化に懐疑を抱き、全面的否定か、部分的否定に身を挺して、旧文化を破壊するダイナマイトの導火線に火をつけた者である。詩自体の芸術価値は乏しいが、

意識的に口火の役を果たした点は、歴史的意義が深い。特に口語による詩作は思想解放と封建意識の残渣を清算する大きな役割を持った。

次に異なる点については、以下のことが考えられる。

1. 「新体詩抄」は、とくに詩壇において論議が展開されたばかりでなく、明治20年代には詩歌論が活発となり、近代詩が成立したのみでなく、短歌の近代化、言文一致の近代小説の誕生にも間接的に影響を与えたと思われる。

一方中国では、「白話詩運動」が文学革命の一環となり、更に「五四運動」へと政治、社会の変革、民族意識の高揚と反帝国主義、社会主義運動へと流れて行って、影響が日本に比べてより広範である。

2. 日本の詩革命は、時間的に早かっただけに、新体詩の流れは詩語と詩形の面でも、ある一定の段階を通して近代詩を形成していったが、中国の詩革命は、その展開と同時に浪漫主義、自然主義、象徴主義が一時に渦を巻きつつ流れこんだのである。

参考文献

1. 日本文

1. 日夏耿之介「明治大正詩史」巻ノ上。
2. 改造社「現代日本文学全集」第37巻。
3. 「日本近代詩」比較文学講座2、清水弘文堂。
4. 中島健蔵監修「近代詩の成立と展開」有精堂。
5. 長谷川泉「近代日本文学評論史」有精堂。
6. 関良一「日本近代詞華集」右文書院。
7. 講座比較文学2「日本文学における近代」東京大学出版会。
8. 増田渉「中国文学史研究」岩波書店。
9. 丸山松幸「五四運動」紀伊国屋新書。
10. 高田淳「中国の近代と儒教」紀伊国屋。
11. 吉川幸次郎「中国の文学革命」(吉川幸次郎全集第16巻所収)。
12. 「新体詩抄」近代文学館復刻本。

2. 中国文

1. 「胡適文存」第1集、台湾遠東図書公司印行。
2. 「新詩三十年」全3巻、香港文学研究出版社。
3. 石峻「中国近代思想史資料『五四時期主要論文選』」大安。

4. 李何林「近二十年中国文芸思潮論」生活書局。
5. 張若英「新文学運動史資料」光明書局。
6. 梁啓超「飲冰室文集」。
7. 「新青年」第2巻～第4巻汲古書院復刻本。

討議要旨

菊地隆雄氏より、発表者は特に中国におけるヨーロッパのインパクトについて述べたが、中国にはアジアの国々に対するある種の共感もあったと思う、たとえばタゴールの「哲理詩」の影響などにみられると思うが、そのありようをも教示して欲しいとの感想があった。発表者より、タゴールの影響というものは確かにかなり受けている。しかし、その他のことでは中国はアジアの諸国に対しては弱者としての共同感のようなものを感じていた程度で、アジア諸国から文化的影響を強く受けたとはいえないとの返答があった。さらに菊地氏から日本と中国の新体詩は封建性を脱皮し、新しい内容と言葉の使用によって成立したところは同じであるが、日本の場合、そのまま新体詩が持続発展していったにもかかわらず、中国では1910年末から20年代初め以外は詩は主として武器と考えられ思想性の強いものに変質していったと思うが、その辺について詳しく識りたいとの質問があり、発表者から、中国では陳独秀の文学革命論というものが1919年、五・四運動の中に内包されつつ動いていったという状況があった。その中で「新潮」などは文学の一つの場を提供したが、やがて辛亥革命によって文化的に混沌としたものは整理されたが、実質は形骸化していったと思う。中国の新体詩は以後政治性を帯びて抒情性が乏しくなったと思うとの返答があった。